

り、唐の中頃までが中世であり、宋以後が近世となるのである。而して博士が、もつて古代とし中世とされる理論的根據は大體上に紹介申し上げた通りである。又宋以後を近世とされる根據は、本論文集に収められた諸篇よりも、もつと後に發表された諸論致に求むべきであるから、茲には除くが、要するに宋以後に於ける生産様式の變化、及び所謂中世が貴族政治の時代であつたに對して宋以後は君主獨裁政治になつたとされる點に在るようである。かかる博士の史觀は世界史的にみて、一つの完成した姿をもつて居り、眞に敬服に堪えぬ所である。然し博士は、古代を規定する場合、人間社會の協同という理念によられ、中世以後は主として人間社會の生産様式の變化に重點を置かれたのであるが、若し氏族制、都市國家、領土國家、大帝國という變化に伴つて生じたに相違ない所のそれぞれの社會内部の構造や生産關係の變化という點に主眼を置いて説けば、どういふことになるのであろうか、この點更に博士の御教示を仰がねばならぬ様に感ずるのである。

以上で宮崎博士の高著「アジア史研究第一」の紹介を終ることにするが、果して其の役割を果し得たかどうか甚だ心もとなく、博士ならびに讀者の宥恕を乞ねねばならぬ。

(濱口重國)

近世中國教育史研究

林 友 春 編

昭和三十三年三月 國土社發行

A5版 本文五四〇頁

最近の中國では、國民の教育ということが重要視され、その向上のためには難解な漢字の枠を打破して、まず文字の簡化という冒險

をさせ敢えて試みた。曾つて中國は、革命後に國語統一籌備委員會を設けて、注音符號を施行せしめ、また國語ローマ字拼音法を公布したことは衆知の事實であるが、現在の中國政府でもやがてローマ字化へと推進してゆく計畫のようである。このような國民大衆の教育向上への努力は、近代中國の大きな課題ともなつてはいるが、革命以前の中國にあつては、國民の教育という觀念は甚だ薄く、學校における教育とは、要するに科擧に對應して設けられ、科擧に及第して官吏となる希望者のための養成所のようなものであつた。したがつてこの學校、すなわち府州縣學にはそれぞれ定員があつて人數の制限を行ない、また進士になる迄には激甚な競争を経なければならず、そこで進士に登第し得ない者が如何になるか、或は府州縣學以外の教育とはどのようなものかなど、かねてから興味をもつていた問題がある。ところが今回東洋教育史學會の諸氏によつてその業績がまとめられ、本書の如き大部な論著が刊行されて、私の平素から關心をもつていた點についても、幾多の成果を挙げられたことを拜見して、誠に欣快に堪えない次第である。

凡そ中國における教育史としては、陳東原氏の中國教育史がよく知られ、陳青之氏の中國教育史、王鳳喈氏の中國教育史大綱なども出たが、いずれも満足すべきものではない。しかもこれらは概ね科擧ルートの學校教育を論ずるものである故、廣範な社會庶民教育に關する個々の問題については、深く掘り下げることは不可能であつたろう。本書への期待はまずこの點にあつたが、副題に示す「その文教政策と庶民教育」の一句は、まさに吾々の希望にこたえるものである。本書はすべて十篇の論文からなり、山崎博士の隋代の一編以外は、元代より清代、特に明清を論じてよく整い、しかも比較的

バラエティに富んだ編集である。

林友春氏の「元明時代の書院教育」は、全十篇の内で元代を取扱つた唯一の論文である。まず續文獻通考に擧げる書院の夥しい事實を提示して、元代書院の隆昌の原因を、異民族支配下における儒者の政治忌避と、印刷術の進歩、および元朝の保護奨励にあると説く。ついで元代書院の組織とその特色を論じて、書院本来の民間自由人の學問的氣風を失ない、元代中期以後には官學的色彩が濃厚となつたこと、また漢文化の隆昌は異民族に對する漢文化の強靱さにあるとされる。ここで秦の李斯任用と、蒙古王朝における程朱の學を比較して、漢文化の根強さを論じられたが、この二者を對照的に扱かうのはいささか妥當を缺くと感じられるが、如何だろうか。さて氏の所論はさらに明代に入り、明初に少なかつた書院が嘉靖前後に勃興隆盛してくる原因を、王陽明と湛若水の講學の影響とみる。ついで明末の書院が官憲の壓迫を受けて衰滅に近づく經過を、とくに東林書院の創立より講會の隆盛を経て、朝政批判から破壊に至つた過程を通して敘述し、元明の書院の性格がかなり相違することを論じようとしたものである。

酒井忠夫氏の「明代の日用類書と庶民教育」は、後でのべる多賀氏の論文につぐ長篇である。まず類書を規定して、特定の目的の爲に、それに関する事文知識を古書傳註等より廣く集め、體系的な門類に分けて檢尋参照しやすくした書物、百科事典に近いものとなし、四庫全書總目提要の類書に對する見解を紹介して、提要から酷評を受けた類書の中に、重要なものが存することを論ずる。さらに現存する類書には、唐宋時代の儒教的士大夫階級の重んじたものと、庶民的民間的な通俗的日用類書があり、とくに總括的事文の類書、啓

劄書翰に關するもの、故事の類書、幼學啓蒙、居家必用等に關する類書などは、日用類書として南宋以來元明に至り多く利用されるようになり、唐宋式よりも廣く貴賤四民を通じて讀書人層の求めに應ずるようになった。なかでも明末に續出する日用類書は、明末の代表的な文人、合理的な政治や社會を求めめる官人士人層、明末の氣節の士や民間の下級讀書人等によつて作成され、文人の結社あるいは小説出版の書肆などの手を介して一般に流通したことをのべて、庶民教育との關連に及んでいる。以上の最後に三教合一の思想及び善書、家庭教育の具體的方法内容、家訓鄉約等についても日用類書と關係が深いことをつけ加えられたが、更にこの庶民教育の實際や家訓等との關連についての具體的な資料が知りたかつた所である。しかしこれは私のささやかな願ひであつて、誠に精緻な書誌學的研究の眞價は、高く評してあまりあるものと思う。

大久保英子氏の「明末讀書人結社と教育活動」は、東林黨が彈壓されて後、魏忠賢の死をへて漸く讀書人の動きが活潑化し、應社、文社、復社と横のつながりをもつ統一體が生れ、やがて小東林と稱して數千人の讀書人を集め得た、この復社について、復社姓氏錄、社事始末、復社紀略等を中心に地方志を廣範に涉獵し、次の問題を主に追求された。すなわちまず復社の成立と變遷を論じて、主要人物の列傳を試み、東林黨の子弟について復社と關係深きことをのべ、地域的分布圖と身分層の分類表を示された。この圖表は關係者の出身地を一見して知り得るもので、甚だ便利がよい。さらに問題は復社に名をつらねる人々がどのように地方鄉村の教化をはかり、鄉村の利弊を論じ、鄉村生活の向上に努力したかという點であり、具體例をあげて謝國禎の明清之際黨社運動考の缺を補つている。また復

社の中に相當の士が科擧にめぐまれず、幾度かの試験に科第せずに終つた者が多く、個々の事例について詳しく探求しているが、これは科擧不遇なる故復社に集つたものか、または復社に關係ある故不遇なるものか。いささか氣にかかることである。また圖表から知る所では、總員約二二五〇名の内、任官もしないいわゆる讀書人は過半数の一二五九名あり、誠に注目すべき現象であるが、その中には下層(貧乏)讀書人が多々あつたことが具體例によつて知り得るものである。しかし復社にはこれら貴賤を問はず包攝し、庶民文化發展に多大の貢獻をしたこと、また農工商人府と呼應して蘇州地方の民變にも重要な役割を果したことは、輕視することが出来ない問題である。ここでは復社と新興市民府の結びつきについて、更に追求されることを希望する。氏がかねてから復社關係の資料を採訪し、たゆまぬ努力を續けられていたことを知る筆者は、常に深い敬意を表していたものであるが、ここにその努力が結實して、輝かしい玉稿となつたことを衷心より喜ぶものである。

安岡昭男氏の「明清時代外藩教化の一斑」は、琉球に對する中國の教育感化を論じたもので、洪武帝の琉球招撫と冊封關係から、閩人三十六姓の移住を考察して、留學生の選拔と中國側の受入れについて敘述を進め、中國の教化に影響された琉球の教學を論じている。そして留學生の教育成果を検討すれば、十分に中國化されたと言ひ得ず、結局琉球の立場が、中國と日本への兩屬という特異性によつて解釋せねばならぬと結んでゐる。

牧野巽博士は「顧炎武の生員論」と題して、明末の生員の實態を追求した顧炎武の見解を紹介している。この生員論は亭林文集第一にあり、はじめに生員を置いた目的を論じて生員制度の弊害に及び、

政治の腐敗、人民の困敗、朋黨の弊害、人材生長の阻害等を擧げて、次の改善案を提示している。すなわち生員の數を制限し、試験制の外に無試験の辟擧の法を併用すること、試験を簡略化してその管轄を地方官に委譲すること、詩文にかえるに經史をもつてすること等である。さてこの改善策には同博士も述べられている如く、必らずしも良法と言ひ得ないものが多く、したがつてそれが當時の社會に適切なものと推察するのは早計であつて、その點に就いては彼の他の意見、たとえば日知錄卷十七にも生員を論じた個所があり、また彼の政治意見、思想傾向とを検討した上で、さらに當時の社會ともならみあわせて考えるべき問題であらう。

大村興道氏の「清朝教育思想史における聖諭廣訓の地位に就いて」は、雍正帝の聖諭廣訓が如何なる過程で成立し、施行されたか、それが如何なる地位にあるかを論じたもので、清朝史を研究する場合、康熙、乾隆にはさまれて見失われかけていた雍正時代を高く評價して、あらゆる角度から研究が進められていた時、この聖諭廣訓についての専門的な研究は、まさに好個な課題であると言える。氏の論考は、はじめに過去における一連の研究概要を論じてその參考論著を紹介し、ついで聖諭廣訓の成立過程を追求し、民衆指導の勸諭として、順治帝の六諭臥碑文→康熙帝の聖諭十六條→雍正帝の聖諭廣訓と發展したことをのべる。次に生員に對して出された順治帝の曉示生員上諭と、明の洪武年間の學校條例との比較を行ない、一層嚴格になつたことを明らかにすると共に、康熙の訓飭士子文、雍正の御製朋黨論、乾隆の欽頒太學訓飭士子文などの思想系列は朱子學によるという。さらに聖諭廣訓の成立理由として、①康熙時代の刷新、②帝自身の性格、③雍正即位の事情、④官界風氣の腐敗、⑤排

滿思想の問題、⑥社會經濟的問題等が考えられるが、最後の社會經濟問題として、國家財政の好轉、農業の發達と農村社會の安定、奢侈生活、流民の鎮出等の諸事情が現われ、これを緊縮刷新するため具體的實質的な廣訓の發布になつたと説く。ついで廣訓の實施を追求し、地方官の宣講、科舉課題への繰り入れ、學校における宣讀、講約所の設置、郷約の結成等にて、あらゆる場を利用して宣講を奨励したことを論じ、従つてアヘン戦争後の新教育章程にもこれを採用し、光緒年間の地方教化の章程にも實行宣講の一項を掲げ、革命前後の新しい教育原理の實行に當つても、なお捨て難いものがあつたことを敘述している。かくて本稿の末尾に、清朝に對する理解の仕方に陳青之の見解と内藤博士等の解釋との相違があることを附記しておられるが、これは清朝の教育政策を考える上には、甚だ必要なことでもあるので、もう少し具體的に比較紹介の勞をとつてほしかつたと思う。また宣講用教科書の一覽表を附載されているが、これらを實際に宣講して、教育成果が如何なる形で現れてきたかを知ることが肝要である。その點次の論文に見える義學とも關連して、検討の筆がのぞましいと思う。

小川嘉子氏の「清代に於ける義學設立の基盤」は、なかなかよくまとまつた論文である。いわゆる義學とは、義捐によつて設立された學校を指し、上海地方の義學を一例にとつて、清代以後に普及設立されたことをのべ、それが清初の文教政策の影響であること、また設立者によつて分ければ、地方の行政官の義捐、若くはその主唱による民間の義捐、或は個人有志又は團體の義捐すなわち地方の讀書人や宗族ギルド同郷人等の義捐等によるものであることを論じている。さらに義學の經營は、田産と官よりの援助等を期待し、司學、

保地、社師等の役員によつて運営され、時には地方官の監督が行われて、會計の監査を受けていたといわれる。また聖諭廣訓の宣講も義學の行なう任務の一つであつた。以上によつてみれば、都市鄉村の一般子弟、特に貧しくて就學の資力のない者の教育機關である義學が、誰の手によつて設立運営されたかが明瞭になるが、清朝はこれに對して直接とりあげずに間接的な奨励監督によつて、これを國家の教育の一環にくみ入れたことは、まさに適切な處置と考えられる。このようにみた場合、義學がその地域社會と密接な關係にあることは當然であるが、その結びつきがどれだけ深いかによつて、義學の位置がさまつてくるものであり、設立者としてのギルド、同郷人等の團體との關係は特に究明されるべき問題であらう。

小竹文夫博士の「清代に於ける中國の外國留學生」は、中國から最初にアメリカへ留學した三名の人物をとりあげて、その留學するまでの経緯、また歸國した容闈が、會國藩を通じて留學生募集計畫を推進する交渉經過、會國藩の上奏によつて、アメリカ留學生を集める計畫が決定し、前後三回の留學實施が如何なる結果を招來したかを論じている。とくに監督者の傳統的な古い思想と、留學生たちのアメリカナイズされてゆく若い頭腦とのギャップが、結局わずかの九年で歸國を餘儀なくさせたことは、まことにあわれである。しかし歸國後に彼等の中から有能な活躍をした人が多く現れたことは、一覽表によつて察知されて興味深い。要すれば變轉してゆく中國社會の流れの上で、それぞれ位置づけてきたら一層わかり易かつたと思う。

多賀秋五郎氏の「宗族の修譜過程について」は、本書中の最長篇であつて、日本に現存する宗譜、通譜、支譜等のなかより、代表的

なものを數種毎えらび、そこに現れた性格を通覽することによつて、清朝の教育史の研究に寄與せんとするものである。はじめに宗譜の性格をのべて、十宗譜の修譜過程を分析し、普通三十年一修の原則が必らずしも實現され得ない理由として、宗族内部の事情と外的環境を考察している。とくに宗人の量と組織化しうる程度、また宗人全體の經濟的文化的水準の高さと、特定の知識人や富裕な人物を包括するというような質的な條件が必要であり、外的な條件として印刷の普及、修譜の流行などの助成的情勢と、天災、兵亂等の抑制的情勢が加わる。これらの條件を満たした上で、名譽欲、利害關係、對抗意識など宗人共通の利害が一致した場合にはじめて修譜が成立するという。しかし必らずしも、族内に知識人や富裕人がなくても修譜を行うことはありうるわけで、最も必要な條件は修譜によつてなんらかの利益がもたらされるといふ共通の意識が生ずることである。これらの條件は通譜や支譜の成立にもある程度あてはまることであつて、通譜の場合は個々の宗族の結合の強固さと、利害關係がより現實的なることが必要であらうし、支譜の修譜には本宗の勢力や同宗間の活動がかなり影響したことであらう。以上の如き成立の事情を把握した上で、個々の宗譜等を有機的に活用することが必要であつて、譜の中に示される家規、家訓等の教育方針、義學記や

家塾記等の學校經營に關する資料、選舉志や旌表志等の族人の教育活動、義莊記や義田記等の學校財政資料を驅使して、明清時代の族内教育を検討すべきものであらう。

最後に山崎宏博士は「隋朝の文教政策」と題して、隋の儒教、道教政策を論じ、佛教と比較すれば、實は佛教優位の態勢にあつたことを強調された論文である。とくに追記にものべられている如く、近世中國の文教政策の一前史として掲げられたものという。

以上つたない筆で十篇の内容を簡単に紹介した。今これを通觀して感ずることは、いずれも中國教育史の基礎的研究ともいふべきもので、精緻な資料の検討と十分な討議によつて、さらに成果を積み重ね、今後の教育史を充實させてゆく素材ともなるものであらう。最近中國では、實際の師範教育のテキストとして、中國近代現代教育史などが出て、この方面の研究に貢獻しているが、アヘン戰爭以前はやはり簡略なので、本書の持つ意義は、甚だ大きいものがある。最後に一言希望をのべるならば、いささか誤植のめだつことであるが、しかし本書の眞價をそこなうものではなからう。かえつて執筆者諸氏の努力に敬意を表するとともに、斯學の發展にますます研鑽されるように期待する次第である。

(間野潛龍)